私の履歴書

前橋汀子 ⑯

入院

作曲家プロコフィエフの没後10年を記念するコンサートが1963年春、レニングラードフィルの本拠地ホリショイ・ザールで開かれた。私はワイマン先生の推挙を受けてソリストとして出演し、プロコフィエフのバイオリンソナタ第2番を演奏した。

連載の第6回で述べた通り、プロコフィエフが亡くなった当日、私は日比谷公会堂の客席にいた。バイオリンの巨匠シゲティが急きょプロコフィエフの曲を弾き、哀悼の意を表した場面を目撃しているのだ。

あれから10年。今度は自分がソ連のステージに立ち、偉大な作曲家を追悼できるなんて思いもよらなかった。

その年の5月、潮田益子さんがベルギーのエリザベート王妃国際音楽コンクールで6位に入った。世界有数の名門コンクールに堂々の入賞である。日本でも快挙として報じられた。

小野アンナ先生、斎藤秀雄先生、ミハイル・ワイマン先生。幼い頃からずっと同じ先生の下で研さんを積んできた潮田さんの入賞は私としても誇らしかったが、複雑な心境でもあった。どこからか「次は前橋汀子だ」という声が聞こえてきたからだ。

ワイマン先生は、私を11月にパリで開かれるロン＝ティボー国際音楽コンクールに挑戦させようとお考えのようだった。私もそのつもりで必死に勉強した。潮田さんに負けない結果を出さなくてはいけない。プレッシャーが重くのしかかってきた。

コンクール挑戦の矢先

担架で運ばれ、枕の下に「遺書」

夏を迎える直前、突然体調がおかしくなった。日本ではほとんど風邪も引かない丈夫な身体だったのに、ソ連に来てからはよくのどが痛くなっていた。しかし、それにしても今度はなかなか熱が下がらない。何も食べられない。

夏休みに入ると、同室のライヤやイーダたちは早々に帰省してしまった。看護師が往診に来て薬を処方してくれたが、1週間飲んでも一向に良くならない。私はとうとう寮のベッドから起き上がれなくなった。ワイマン先生が心配して駆けつけた。

「テイコ、お願いだから病院に行ってくれ」。もうろうとして動けない私を見て驚いた先生が救急車を呼んだらしい。担架で運ばれ、気がついた時は郊外の病院にいた。

「これに着替えなさい」。渡された白い病衣はだぶだぶに大きく、ズボンの片方に自分の両脚がすっぽり入ってしまう。私は余ったズボンを腰ひもで体に巻きつけ、そのままベッドに倒れ込んだ。

もう入院して何日もたつ。しかし治る気配がない。私はどこが悪いのですか。本当のところはどうなんですか。そう何度も医師に尋ねた。

私が入っていたのは20人か30人ぐらいの患者がひしめく大きな病室で、窓の外には木々の緑が見えた。どうやら公園のようだった。後年、ソ連のノーベル文学賞作家ソルジェニーツィンの小説「ガン病棟」を読んだ時は、真っ先にこの病室を思い出した。

私はここで死ぬのかもしれない。本気でそう思った。枕の下に遺書らしきものをしのばせた。自分が意識を失った時に読んでもらうために。「もし私の病気が深刻なものでしたら、このまま飛行機に乗せて東京へ連れて帰ってください」。最後に「飛行機代は東京で両親が払います」と付け加えておいた。

（バイオリニスト）

レニングラード郊外で（左から潮田さん、ワイマン先生、筆者）

掲載日 2018年10月17日 日本経済新聞 朝刊 36ページ ©日本経済新聞社 無断複製転載を禁じます。